

## 「2023年度中国・浙江大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 小谷 みのり

二週間では正直何を学べるのかはわからなかった。言語を習得できるわけでもないし、長く続く友達ができるわけでもない。でも思ったより中国の生活の雰囲気を感じられたし、他の留学生とも交流できた。また海外において日本の意欲ある学生と交流し刺激を受けるという意外な学びがあった。

私は中国の人々を見て、「中国」という自分の国の中だけにおいて生活しているという印象を受けた。グローバル社会と言われる現代において、他の国と連関しているという意識があまり感じられなかったことを意外に思った。日本人も、日本語という特有の言語、特有の文化があり日本人のアイデンティティはかなり確立されているほうだと思っていた。一方、中国はSNSの媒体、検索プラットフォーム、地図、支払方法も独自の方法を持ち、言語も中国語という固有のものがあり、英語併記、日本語併記は基本的に無い。食べ物も中華料理が基本で、パンや、マクドナルドやケンタッキーなどのファストフード店は至る所にあるものの価格がいくらか高く感じた。観光地には他の市から訪れた多くの中国人がおり、このように自分たちの国の中だけですべての生活が補えてしまえるという意識をいたるところから感じた。自国の文化、生活に対する安心感のようなものを感じ、その安心感日本は日本のニュースを通して知る中国のイメージとは大きく異なっていた。

中国で一週間ほど過ごした後、「あんどうさん」と名乗る親日の中国人の方と出会い食事をする機会があった。そこで、中国人はお年寄りの方だけでなく現代の若者も日本を嫌っている、という話を聞いた。南京事件などによる反日感情がお年寄りの間にあることは理解していたが、若者は日本に対する偏見が強くないものだと思っていた。しかし、あんどうさんの話によると、今の20歳以下の子供たちは日本は馬鹿だ、というような教育をされているという。「アラブの春」では若者中心SNSを発端とした民主主義運動が起こったように、若者はSNSなどを通して世界的な視点を持つものかと思っていたが、中国においては情報統制が徹底されているため政府の方針や思想などに疑問を持つことも少ないのだろうということが分かった。

中国に行く直前に、友人に浙江大学のプログラムに参加することを話すと、「中国の古代の文化や歴史には興味があるのだが最近の中国には良くないイメージがあり行きたいかというところでもない」という旨の返答があった。中国と日本はかかわりが深い、互いに偏見が多いことを実感している。確かに日本における中国のニュースは、中国に反感を持つようなものも多い。例えば、多数の監視カメラで日常的に監視されていることや情報統制、日本での爆買いや観光客のポイ捨て、最近だと飲料水会社に対する誹謗中傷などのニュースは中国・中国人に嫌なイメージを持つきっかけを与えてしまうだろう。しかし、二週間過ごただけではあるが、杭州は自然が豊かで食べ物もおいしく、ごみも落ちておらず、人もみんな親切で本当に素晴らしい街であった。特に食べ物がおいしく、学食では格安で美味しい中華料理が食べられるので小籠包や魚炒め、東坡肉や杏仁豆腐を食べまくった。寮の前のワンタン屋も美味しくてたくさん食べた。フルーツが安くて美味しいので、寮の前のフルーツ屋でマンゴーやオレンジを買い、寮のロビーで毎晩フルーツパーティーをした。土日に訪れた蘇州や紹興も、自然の景色が素晴らしく、本当に良い場所であった。タクシーの運転手や店の人、警備員も気さくな人が多く、中国語を教えてくれたり、名所を教えてくれたり親切な人が多かった。セミナー発表の学生は流暢に英語を話し、日本人学生と積極的にコミュニケーションを取ってくれ、その学が姿勢から多大な刺激を受けた。中国の良い面を多く知れたことが嬉しかったし、これまでは自分が主体となってやろうとは思っていなかったが両国の偏見をなくすような活動、主に日本人の中国に対する偏見をなくす活動を是非したいと思うようになった。

初めに述べたように二週間はあっという間に過ぎ、中国語の能力が劇的に伸びた、というような成果は得られなかったが、中国の生の空気感を体感できたこと、社会の問題を身近に捉えられるようになったことなどの成果が得られた。私はもともと中国が好きだったが、このプログラムを通してもっと好きになった。